様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２６５６

研究課題名（和文）前近代文学者たちの近代―明治・大正・昭和期における伝記と肖像の継承と変容

研究課題名（英文）Verbal and Pictorial Images of Pre-Meiji Literary Figures: Continuance and Transformation in Modern Times

研究代表者
永井　久美子（NAGAI, Kumiko）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：１０６４７９９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：上代から近世までの代表的文学者の人物伝と肖像を横断的に分析し、近代以後、古典文学とその作者の人物像がどのように伝わり、広まったかを追う研究を、コロナ禍理由による補助事業期間延長を受け7年間にわたり実施した。伝記および肖像が取り上げられる頻度や顕彰のあり方が、現代における古典評価の価値観と密接に結びついていることを、具体的な論考を重ねることで検証した。中でも、小野小町や紫式部、清少納言といった平安女性の肖像の分析を充実させることができた。美醜意識の変遷についても論じる結果となり、幅広い分野の研究者との交流を持つに至った。研究成果は、国内のみでなく国際学会等でも発表し、活字化を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現代人が古典に求める価値観を明らかにした本研究は、申請当初から文学と絵画の双方を扱う領域横断型の内容であったが、サブカルチャーを含めた現代文化との繋がりを考察し、美人観の変遷をたどる研究ともなったことで、歴史学や心理学、医学など異分野との交流を持つに至った。中でも論考『「世界三大美人」言説の生成』は特に多くの読者を得て、一般そして高校生に向けて研究成果を発信する機会に恵まれた。容姿をめぐる美意識の変化を論じ、人が画像から得る印象を分析したことは、多様性の重視、ジェンダー平等が目標となっている今日において、人々の価値観を客観視する一つのきっかけを提示できたと考える。

研究成果の概要（英文）： Through a cross-genre analysis of the biographies and portraits of representative Japanese literary figures from the early to modern eras, my study traces how classical literature and the personalities of its authors have been transmitted and disseminated since the modern era. The study period was extended owing to the COVID-19 pandemic, and the project was implemented over seven years.
Through a series of specific discussions, I verified that the frequency of biographies and portraits and the way in which the literary figures are honored are closely linked to contemporary values in evaluating classics. In particular, I was able to enrich my analysis of the portraits of Heian women such as Ono Komachi, Murasaki Shikibu, and Sei Shonagon. I also discussed the transition in consciousness of beauty, which led me to exchange ideas with researchers in a wide range of fields.
This study’s results have been presented at both domestic and international conferences and published.

研究分野：比較文学比較文化、日本古典文学

キーワード：文学者　肖像　絵巻　写真　近現代　古典受容　美人観　『源氏物語』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

報告者は、2014 年度から 2016 年度にかけて、科研費若手研究（B）「近現代日本における古典文学の受容と関連文化財の評価の連動性」の助成を受け、国文学史が編纂され、『源氏物語』などのテキストがカノンとして文学史上の地位を確立する経緯と、絵巻や古写本が高い市場価値を獲得する過程との関係性を追った。古美術品の評価の変遷をたどることで、日本の文化財保護が、廃仏毀釈に対する宗教美術の保全から範囲を広げ、国際的に評価される〈日本文化〉の保護と発信へと変貌を遂げた様相を明らかにした。文学と美術の双方を分析することで、ジャンル毎に分断されてきた従来のアプローチとは異なる、より広い視点から、文化財の評価軸の変化を追うことができた。

上記の若手研究に加えて、2015 年度に鹿島美術財団より助成を受け、紫式部の評伝と肖像の近代における受容と変容を追う機会を得たことで、文学作品の評価とともに、作者の評価の変化が美術界に与えた影響についても調査を行った。鹿島美術財団における研究課題「紫式部の近代表象――古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」は同財団で優秀者表彰を受け、研究の方法および内容が新しく有意義であることが評価された。近代画壇での描かれ方、学校教育における伝記の引用のされ方など、実証性の高いものから伝承レベルの言説まで人物伝を広く調査し、文学者たちの人物像の「虚」と「実」がそれぞれ明治以降どのように流布したかを、文字資料と絵画資料の双方を追うことで明らかにした鹿島美術財団での研究の方法は、紫式部以外にも応用が可能であり、複数の文学者たちを横断的に見ることで、明治以降、日本古典文学に求められた役割や文豪たちに期待された人物像について広く考察することができると考え、本研究を申請した。

文学者の伝記や肖像画については、個別の作品についての研究こそあれ、複数の資料を横断的に見る総合的な研究はなされてこなかった。また、教科書などの挿図は、美術史学における研究の少ないところであり、信憑性の低い伝承は、評伝研究では対象外となりがちであった。従来の研究ではとりこぼされてきた作品等も検証することで、流布した人物像の全貌を追えるものと考えた。専門分野は時代別、ジャンル別に分断されがちであったところ、報告者が従来、平安時代の作例以外にも室町絵画、江戸絵画、さらには近代絵画についても論じた経験を有し、絵画のみでなく、物語、説話、和歌についても研究を行った経験もあったことから、これまでの積み重ねが独創性ある領域横断研究に役立てられるという見通しのもと、本研究に着手した。

２．研究の目的

古典文学の作者たちの伝記や肖像画がどのように受容されてきたかを追うことは、現代における文学の意義、古典受容のあり方、そして「偉人」を評価する価値観を浮き彫りにすることに繋がる。今日の日本において、人々が日本古典文学に何を求めているのかを検証することは、現代人の価値基準を相対的に客観視することを可能にする。

たとえば現代では日本を代表する古典文学作品とされる『源氏物語』にも、時代や評者により毀誉褒貶があった。多様な評価や受容のあり方については、島内景二・小林正明・鈴木健一編『批評集成　源氏物語』全 3 巻（ゆまに書房、1999 年）や、田村隆編・解説『源氏愛憎　源氏物語論アンソロジー』（角川ソフィア文庫、2023 年）に詳しい。紫式部についても、平安末期には狂言綺語の罪により地獄に堕ちたとされ、鎌倉期には観音の化身であるとされるなど、その評価は仏教からの影響のあり方や女性観により揺らいできた。

『源氏物語』や紫式部といった個々の作品や人物についての受容史、評価史の研究はあるが、個別の問題にとどまらず、複数の古典や人物について評価の変遷史を横断的に見渡すことで、今日における日本古典文学に対する価値観を明らかにすることが、本研究の新しさであり、目的である。

文学と絵画の領域を横断することを通して、テキストのみ、美術のみでは捉えられなかった人物イメージの全体像を明らかにすることも、本研究の目的である。古典評価の確定、日本文学史の形成をめぐっては、ハルオ シラネ・鈴木登美編『創造された古典――カノン形成・国民文学・日本文学』（新曜社、1999 年）や、井波律子・井上章一編『文学の近代――転換期の諸相』（日文研叢書第 22 号、国際日本文化研究センター、2001 年）といった先行研究があり、日本美術史の創生についても、佐藤道信『〈日本美術〉誕生――近代日本の「ことば」と戦略』（講談社、1996 年）、矢島新・山下裕二・辻惟雄『日本美術の発見者たち』（東京大学出版会、2003 年）などの研究が行われ、1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて、活発な議論が展開されてきた。しかし、研究が文学と美術のジャンルに分断されていたがゆえに、同時代の全体像が見えにくく、文学史と美術史の草創の関係性については議論がなされてこなかった。前近代と近代、文学と絵画という時代とジャンルを横断して、古典の本文に加え、その視覚化作品が受けてきた評価も見渡すことにより、日本古典文学の受容のあり方の総体を明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

鹿島美術財団における助成研究にてすでに進めていた紫式部についての研究を一つの指針として、上代から近世までの代表的な文学者たちの伝記と肖像を分析する。具体的には、幕末から明治初期にかけて刊行され、多くの歴史画や略伝の手本とされた菊池容斎による絵入り伝記集『前賢故実』を手がかりに、その源泉となった文章や画像を探るとともに、実証性が重視された『前賢故実』の影響を受けた近代以降の教科書、評伝といったテキストと、大衆文化において流布したより自由度の高い人物像のバリエーションを広く探究するものとする。

時代を象徴する文学者として、『万葉集』の代表歌人と呼べる額田王と柿本人麻呂、『古今和歌集』編者そして『土佐日記』作者としての紀貫之、小野小町、和泉式部、清少納言ら平安女流文学者たち、西行、鴨長明、吉田兼好ら遁世者たち、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶ら江戸期の俳人たちを主に取り上げることを計画した。すべての文学者を網羅できるものではないにせよ、複数の人物の近代における伝記、肖像画の広がりを横断的に調べることで、「古典」や「文豪」に求められたイメージとは何かを論じることが可能となる。この方法は、新たな論点の開拓、ジャンル横断、時代横断と複数の面において極めて独創的であり、学術的に高い意味を持つと考える。

調査は時代順に進めることを基本としつつも、紫式部研究に先に着手していたことから、平安文学と女流文学者の研究からスタートするものとした。将来的には、文学者以外も対象とした偉人伝の言説と表象のあり方を広く問う研究の第一歩として、本研究を位置づけることができる。

４．研究成果

鹿島美術財団にて 2015 年度に助成を受けた研究「紫式部の近代表象――古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」[1]は国内外で高く評価され、鹿島美術財団で優秀者表彰を受けたほか、科研での研究開始後、より広範囲の作例を対象とし発展させた内容を韓国外国語大学校で発表し、韓国の学会誌『日本研究』に「近代以後の紫式部像の変遷――三つの肖像とその背景」を掲載するに至った[2]。

当初から上代から近世までの文学者たちを広く取り上げる計画のもと、紫式部に関する研究にすでに着手していたことから、平安女流文学者についての調査にまず取り組んだ。科研と併せて、2018 年 10 月から 2019 年 9 月にかけて東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター（HMC）でも「平安女流文学者たちの近代――「良妻賢母」と「美人」と文学」という課題で研究助成を受け、小野小町、和泉式部、清少納言らの伝記と肖像が近代以降どのような女性観のもとで受容されたかを問うた。伝承レベルの言説まで手広く調べる中で、小野小町がなぜ「世界三大美人」の一人に数えられるのか、その背景を考察した論考は、HMC ブックレット[3]として刊行したところ一般の読者にも広く読まれ、高校生からも質問が届くなど、特に大きな反響を得た。研究成果は、国際比較文学会でも発表している[4]。

「世界三大美人」言説についての研究は、現代におけるルッキズムをめぐる問題としても注目

され、東京大学現代日本研究センターで招かれてセミナーで発表を行ったほか[5]、平安末期の絵巻「病草紙」に表された美醜感覚をめぐる論考で取り上げた問題[6]と合わせて、『大阪保険医雑誌』のルッキズム特集号にエッセイを寄稿するに至った[7]。科研の課題は、申請当初から文学と美術のジャンル横断研究であり、前近代と近代との関連性を問うものであったが、肖像画の分析が美人観の変遷をめぐる研究へと繋がったことから、医学や歴史学、心理学、情報学、哲学といった他の分野の研究者との交流の機会が増え、また、現代における美意識を古典との比較から客観的に問うテーマとなった。前述のヒューマニティーズセンターにおいて、2023 年 1 月からは「「顔」は何を語るのか――過去から未来へ」[8]なる大きなテーマで協働研究を代表者として企画し開始したことを契機として、異分野交流を継続的に行っている。

科研の申請当初は、近世までの文学者の伝記と肖像を対象とする研究課題であったが、現代における「文豪」イメージの形成史に関心が広がり、近代、特に夏目漱石の以前以後で文学者の肖像の類型にいかなる変化が見られたか、頬杖をつく姿勢が知的に見えるというイメージはいかにして定着したのかを問い、『排他と頬杖――作家イメージの類型論』なる論考をまとめるに至った[9]。申請時に予定していた西行、長明、兼好ら遁世文学者の研究が遅れたが、中世絵巻に描かれた人物たちと近代の文豪たちの姿勢の差異についての論文を現在執筆中である。

ブックレット『排他と頬杖』でも、漱石、芥川、太宰ら複数の文学者について横断的に論じたが、執筆中のもう 1 本の論文では、書物を持つ姿についての類型論を、前近代の人物たちについて論じている。これらの横断的論考からさらに議論を広げ、現代の日本人が「文学」や「知性」に求めるイメージとは何かという問題を、今後さらに深く議論してゆきたいと考えている。

研究計画のうち、江戸文学の明治における評価のあり方と、芭蕉、蕪村、一茶ら江戸の文学者たちの近代以後のイメージの関連性についての研究が遅れたが、一方で、平安女流文学者研究の成果に対する反響が大きく、小野小町や紫式部、清少納言についての研究を予定以上に充実させることができた。ブックレット『「世界三大美人」言説の生成――オリエンタルな美女たちへの願望』[10]では、日清戦争、日露戦争の結果が「世界三大美人」に中国の美女、西洋の美女と並び日本の美女を挙げてよいという国の自負に繋がったことを明らかにし、続編論文となる「「世界三大美女」言説と戦後日本の美人観――小町とヘレネの交代から考える」では、太平洋戦争の結果が、日本女性の評価を低くし、小野小町に代わりトロイのヘレネを三大美人の一人に数える発想を生み出したことを解き明かした。戦争などの時代背景との関連性を問い、美人観の変遷を追う研究ともなったことは、前述のように他分野の研究者との交流を多く持つことに繋がり、研究計画当初の予想を超える成果を得た。

また韓国では、紫式部の肖像について講演を行ったのみでなく[11]、映画『シン・ゴジラ』に認められる記紀神話の要素を分析する発表を仁川大学校で開催された国際シンポジウムで行い、大衆文化における古典イメージの流布の問題を広く考察し[12]、研究計画時以上の研究テーマの広がりと国際交流の機会を得ることができた。

さらに、紫式部の研究において『源氏物語』を読み直したことから、幻巻における光源氏の美貌と老いの描写を浦島伝説との関連性から考える論文も発表し[13]、『源氏物語』のテキスト研究にも携わった。絵巻「病草紙」の分析[14]と併せて、作品研究も深めるに至った。個々の作品研究を充実させたことと並び、美人観、知識人観、古典観といったイメージ研究へと裾野を広げられたことが、本研究の大きな成果である。

---

1 『鹿島美術財団年報』第 33 号別冊、鹿島美術財団、2016 年 11 月、pp. 412～423。

2 第 75 号、2018 年 3 月、pp. 7～32。

3 永井久美子『「世界三大美人」言説の生成――オリエンタルな美女たちへの願望』東京大学ヒューマニティーズセンター Humanities Center Booklet 第 6 号、2020 年 12 月 24 日、pp. 1～40（PDF 版公開あり https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/booklet/,

https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/search?page=1&size=100&sort=controlnumber&search_type=2&q=8524&timestamp=1627631045.1094701)。本報告書にURLを掲載したウェブサイトは、いずれも2024年5月30日に最終閲覧。

[4] NAGAI Kumiko, "The World Beauties and Classical Japanese Waka Poetry" International Comparative Literature Association (ICLA) Congress Macau 2019, University of Macau, 2019年7月30日。

[5] 永井久美子「「世界三大美人」言説と現代日本のルッキズム」東京大学現代日本研究センターセミナー、オンライン開催、2021年3月11日。

[6] 永井久美子「暴露の愉悦と誤認の恐怖――「病草紙」における病者との距離」牛村圭編『文明と身体』臨川書店、2018年10月31日、pp. 9〜37。

[7] 永井久美子「見た目差別と貴族の価値観――「病草紙」に描かれた平安時代」『大阪保険医雑誌』第56巻第670号（特集・ルッキズム――外見至上主義の変遷と現在）大阪保険医協会、2022年6月20日、pp. 9〜11。

[8] 協働研究紹介ウェブサイトのURLは下記の通り。
https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/collaborative-research/

[9] 永井久美子『排他と頬杖――作家イメージの類型論』東京大学ヒューマニティーズセンター Humanities Center Booklet 第19号、2023年3月20日、pp. 1〜33（PDF版公開あり https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/booklet/, https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/search?page=1&size=100&sort=controlnumber&search_type=2&q=1678955303357)

[10] 註3前掲書。

[11] 「『紫式部日記』の近代」韓国外国語大学校学術交流シンポジウム「近現代文学の諸相――比較文学比較文化の視点から」於・韓国外国語大学校日本研究所、2017年6月3日。発表内容を活字化したものが、註2前掲論文である。

[12] 永井久美子「『シン・ゴジラ』と日本神話」仁川大学校日本文化研究所国際シンポジウム「『シン・ゴジラ』と日本の想像力」於・仁川大学校人文大学、2017年12月2日。発表内容は次の論文として活字化している。永井久美子「記紀神話としての『シン・ゴジラ』――ヒルコ、カグツチ、スサノオの物語」東アジア日本文学会『日本文化研究』第80輯（ISSN 2765-7124)、2021年10月、pp. 85〜106、DOI ： 10.18075/jcs..80.202110.085, https://www.kci.go.kr/kciportal/ci/sereArticleSearch/ciSereArtiView.kci?sereArticleSearchBean.artiId=ART002767290 （PDF版公開あり）

[13] 永井久美子「『源氏物語』幻巻の四季と浦島伝説――亀比売としての紫の上」島尾新・宇野瑞木・亀田和子編『アジア遊学246　和漢のコードと自然表象――16、7世紀の日本を中心に』勉誠出版、2020年3月、pp. 115〜123。論文執筆に先んじて、以下の口頭発表も行った。永井久美子「『源氏物語』幻巻の四季と浦島伝説」ワークショップ「和漢の故事人物と自然表象――16、7世紀の日本を中心に」於・東京大学東洋文化研究所、2018年12月24日。

[14] 註6前掲論文。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 永井久美子	４．巻 19
２．論文標題 排他と類杖――作家イメージの類型論	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Humanities Center Booklet	６．最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002006816	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井久美子	４．巻 80
２．論文標題 記紀神話としての『シン・ゴジラ』――ヒルコ、カグツチ、スサノオの物語	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『日本文化研究』	６．最初と最後の頁 85-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18075/jcs..80.202110.085	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 永井久美子	４．巻 6
２．論文標題 「世界三大美人」言説の生成――オリエンタルな美女たちへの願望	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学ヒューマニティーズセンター Humanities Center Booklet	６．最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井久美子	４．巻 75
２．論文標題 近代以後の紫式部像の変遷――三つの肖像とその背景	５．発行年 2018年
３．雑誌名 韓国外国語大学校日本文化研究所編『日本研究』	６．最初と最後の頁 7-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　7件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 永井久美子
2．発表標題 「美人」の「基準」と和歌文化――大正期の場合
3．学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第101回オープンセミナー（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 上田竜平・鈴木敦命・髙岸輝・鈴木親彦・永井久美子
2．発表標題 日本中世に描かれた人物顔貌に対する特性判断――valence-dominanceモデルの適用可能性の評価
3．学会等名 日本心理学会第87回大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 永井久美子
2．発表標題 光源氏の〈美〉と〈老い〉と浦島伝説
3．学会等名 京都大学分野横断プラットフォーム構築事業「人物顔貌の芸術表現とその認知――人文学・認知科学・制作からのアプローチ」ワークショップ（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 永井久美子
2．発表標題 方丈・草庵・書斎――長明・兼好の肖像と近代文学
3．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究　「ソリッドな〈無常〉／ フラジャイルな〈無常〉――古典の変相と未来観」（研究代表者：荒木浩） 2022年度第3回共同研究会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 作家イメージの類型論――頬杖、たばこ、筆記具
３．学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第74回オープンセミナー（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 作家の身体と新聞報道――三島由紀夫の例から考える
３．学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第55回オープンセミナー（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 「世界三大美人」言説と現代日本のルッキズム
３．学会等名 東京大学現代日本研究センター（TCJS）セミナー（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 NAGAI Kumiko
２．発表標題 The World Beauties and Classical Japanese Waka Poetry
３．学会等名 International Comparative Literature Association (ICLA) Congress Macau（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 「恋愛歌人」としての和泉式部と女人往生――近代以後の和泉式部伝における「くらきより」歌の評価
３．学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第14回オープンセミナー（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 『源氏物語』幻巻の四季と浦島伝説
３．学会等名 ワークショップ「和漢の故事人物と自然表象――16、7世紀の日本を中心に」
４．発表年 2018年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 近代「美人」言説における小野小町
３．学会等名 東京大学ヒューマニティーズセンター第2回オープンセミナー（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 紫式部の近代表象――古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察
３．学会等名 第24回鹿島美術財団研究発表会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 『シン・ゴジラ』と日本神話
３．学会等名 仁川大学校日本文化研究所国際シンポジウム「『シン・ゴジラ』と日本の想像力」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 『紫式部日記』の近代
３．学会等名 韓国外国語大学校学術交流シンポジウム「近現代文学の諸相――比較文学比較文化の視点から（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 永井久美子
２．発表標題 紫式部の近代表象――古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察
３．学会等名 第24回鹿島美術財団研究発表会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 荒木浩・前川志織・木場貴俊 編	４．発行年 2021年
２．出版社 ＫＡＤＯＫＡＷＡ	５．総ページ数 376
３．書名 『日本大衆文化研究叢書　第4巻　〈キャラクター〉の大衆文化――伝承・芸能・世界』	

1．著者名 佐野みどり先生古稀記念論集刊行会編	4．発行年 2021年
2．出版社 青簡舎	5．総ページ数 1129
3．書名 『造形のポエティカ――日本美術史を巡る新たな地平』	

1．著者名 島尾新・宇野瑞木・亀田和子編	4．発行年 2020年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 268
3．書名 『アジア遊学 和漢のコードと自然表象――16、7世紀の日本を中心に』	

1．著者名 牛村圭 編	4．発行年 2018年
2．出版社 臨川書店	5．総ページ数 296
3．書名 『文明と身体』	

1．著者名 加須屋誠・山本聡美編	4．発行年 2017年
2．出版社 中央公論美術出版	5．総ページ数 259
3．書名 『病草紙』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 東京大学ヒューマニティーズセンター第74回オープンセミナー「作家イメージの類型論――類杖、たばこ、筆記具」	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 東京大学ヒューマニティーズセンター第55回オープンセミナー「作家の身体と新聞報道――三島由紀夫の例から考える」	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関